

---

# バイオハザード

eclair13farron

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイオハザード

### 【NNコード】

N6646W

### 【作者名】

eclair13farron

### 【あらすじ】

マスターは追い込まれていた

「間にあえー！」

だが、化け物はマスターの脚に噛みついてきた

マスターは転倒し、化け物の群れに喰われていく

「ちっ・・・痛みすら感じねーな

マスターは心の中で思つた

意識は遠くなり一度と明けない深淵へと引きずり込まれていった

## バイオハザード Chapter 1（前書き）

私今回初めて挑戦します

バイオが大好きで  
発売日にリバイバルセレクションを買つたのですが  
なんと、その前日に入院

あらり

ドジを踏んだせいでなかなかプレイできませんでしたw

初心者ですが「まあ、見てやるか」みたいなノリで見て下さい^ ^

バイオハザード Chapter 1

Chapter 1

の長い夢で、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか

普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚

氣を抜くことすらできない

力切な人は死に  
街は一晩で壊滅

人間の形をした化け物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる

その言葉は何よりも重い気がしたのだ  
一生を残る「

俺の中での一牛のラウマであつ続けるだらう・・・・

## 休日の昼

ウォードはバーで飲んでいた

昼間から飲むのはいただけないか、仕事がなかつたり、中毒で飲んでいるわけではない

極度の酒好きに加え、ガンマニアである

後者は彼が元軍人だつたので分からぬこともない  
自宅には酒のコレクションや、ハンドガンからマグナムに至るまで  
武器をコレクションしている

話を戻すと、なぜバーで飲んでいるかと言つと

同僚の女性警察ラムが遊びの誘いを断つたからである

特別気があるわけではないが、一人で行動することが苦手なウォードはラムが断つた

分かつた時からここにきて酒を飲もうとした算段である

バーのマスターが話してきた

「なあ、ウォード」「最近話題になつてゐる人喰い病つて知つてゐるか?」

「ああ、警察の中でもメインで取り上げられてゐるからな」とウォードは返した

「それに、俺が専属してゐる特別警察ではそれに備えて訓練で最近厳しいよ」

### 人喰い病

最近この街で噂されている(ニュースにもなつてゐる病氣である)  
病氣であると言つても見た人がいないからあくまで比喩である

人間が人間を喰らいつくとかそういう噂である

実際死体が見つかつた時、ぐちゃぐちゃな姿で見つかつたのを映像で見たウォードである

ウォードはすでに結構な量の酒を飲んでいた

が、酒を飲んでも飲まれるな主義であるウォードはまだまだいける口だ

時間はそれなりに経つており、ガラス越しに空が暗んできた頃だつた

「ガチャ」

「いらっしゃい」とマスター

しかし、様子が変だ

なんというか、インフルエンザで毒された人がふらふらしているみたいだ

うめき声も聞こえるし、田も由田をむいている

一般の客が心配して近寄ろうとした時、ウォードの直感が働いた

「そいつに近寄るな！！」

脚のホルスターからハンドガンを引き抜いて構えた

「動くな！動くなと言っている！！」

よろよろと近づいてくる

発砲した

「パン、パン

左足に一発、しかし、動きが止まらない・・・

「こいつ・・・」

次は普通の人間なら動けなくなるだろ？急所を撃つた

「パン

止まらない

今までで初めてだ

強盗、テロリスト、そいつらの中でも撃たれても根性が何かで動く奴がいる

だが、動くといつても痛そうにはするし動きが鈍くなる  
今のこいつにはそれが全くない

「マスター、ショットガンを貸してくれ」

マスターの生い立ちこそ知らないが、同じガンマニアとして  
バーにはホンモノが飾つてある  
だからこそウォードと話が合つただろ？が

「ガチャ、ズトーン」

胴体を撃ちぬいた

ようやく倒れ、動かなくなつた

「もしかしたら、これが人喰い病……なのか！？」  
マスターは言った

それと同時に、他の客が「これが最近噂になっている～～」何たら  
と騒ぎだし

パニックになつた

店から何人か逃げ出した

「おい、中の方が安全だここに～～」とウオードが言つ前に消えてい  
つた

「うわあ何だ来るな」「ぐわああああーー」

すぐに聞こえてきた声は、間違いなく今さつて出て行つた連中のそ  
れだ

客の一人がドアに鍵をかけた

「おいおい、喰われているぞアイシング」「ビリになつているんだよお

「ひい！」

男は尻もちをついた

ガラスに奴らが張り付いている

「お前らの肉も喰わせろ」とは言つていないが、動作で分かる  
低下しているだろう知能で強化ガラスを懸命に叩いている  
人間よりも力が強いのは見ていれば分かる

「おい、皆各自武器をマスターから貰え」

「ここにはマスターと俺で時間を稼ぐから、裏口から逃げる」  
「近くの病院に逃げ込め！」

「それでいいよな？マスター！試し撃ちがしたかつたんだろ！？」

とウォードが言つた

「へつ…悪い冗談言つてくれるなよ」「こっちだつてちびりそ  
うな  
んだ」

「まあいい、このテザートイーグルを試食させてやるから感謝しな  
化け物」

強化ガラスの先にバリケードとしてイスやテーブルをを固めた

クモの巣のようなヒビが徐々に大きくなつていく

!!!

バリンという音とともに奴らがダラダラッと流れ込んできた  
すでに他の客はここにはいない

ウォードがショットガン

マスターがデザートトイーグルを構え発砲した  
やはりハンドガンと違い、威力が高い  
頭部に一発撃ち込むときれいに吹き飛ぶ  
マスターのデザートトイーグルは言うまでもない  
マスターのテンションも上がってきている

が、続々と流れ込んでくる化け物どもに弾が追いついてこなくなつ  
てきた

二人とも勇敢に戦つてはいるが、人間の姿と何の変色もないこいつ  
等と  
化け物じみた耐久力のこいつ等を相手にしていて恐怖や驚きが少な  
くとも隠せないでいた

ショットガンの弾は切れウォードはマシンガン

マスターは相変わらずデザートトイーグル

「くそつ弾切れか・・・」マスターがポケットからマガジンを取り  
だそうとした時

手が滑つた

無意識に手が汗ばんでいた

無理もない、こんな状況で平然を保てる人間など銀河系に一人もい  
ないだろう

もう一つしかマガジンがなかつたので、マスターは捨おうとした  
もちろん奴らとの距離を保つて

だが、倒れている奴のそばに落ちたマガジンを拾おうとした時であつた

想像はつくだらう

「倒れている」だけで「死んでいる」訳ではなかつた

「噛まれた」

やつと食べると言わんばかりの噛む力である

「うおおおおお！」マスターは叫び、銃で思い切り頭を殴つた

奴の動きは止まつた

だが、手首の肉が見えるほど食いちぎられた

「マスター大丈夫か！？」

ウォードも気が抜けない状態で、マスターを見ることができないが声で分かつたのだろう

「ああ、だが手首を噛まれた」「骨が見えてやがる」

マスターが無事で（無事ではないが）ウォードは安心した

「そろそろ俺らも移動しよう、マスター」

「ああ、そうだな」「奴らとの距離が近いからな」

「まあ、お前だけ行けやウォード」

「アンタは？」

「なーに、俺はさつき脚を噛まれている」「一緒にいても足手まと  
いだ」

実際マスターは、噛まれた手首のせいで気が散り、さらに銃の反動  
に対応しづらくなり  
脚を二か所噛まっていた

「死ぬ気か！？」

「バカヤロー、こんなところでくたばるかつてんだ」「いいから先行  
け」

本来警察官である自分が残るべきなのに・・・

「警官のお前が、先病院に行つた奴らを護つてやれ  
「くつ、分かつた」「死ぬなよ」

ウォードは正義感が強い

マスターは一般市民

残るのは自分と考えるべきだが、他の奴を頼むと言われたら  
人数からしてそちらを選ぶ  
ウォードは裏口へ向かつた

「ケツ！ 一体何体いるんだ、お前らは」

「デザートイーグル」反動が大きいこの銃は一般人が撃つことによ  
つて

健康を保証できない

それを何発も撃ち込むマスターの実力はそうとうなものだが、弾が  
切れた

ハンドガンでは対処できない

「さて、俺もそろそろ逃げるか」

裏口までは数十メートル

脚を引きずりながら向かつた

「よしひのろまめ！ これで……」追いつけないだろ  
と言おうとした時である

裏口が開いた

ゆづくじと・・・

マスターは血の気が引いた

裏口から入つてきた・・・

よく考えれば、先に逃げた連中が何事もなく裏口から逃げられた方が珍しい

これだけ侵入してくるコイツらは裏口からでも入つてこれるハズだからだ

いや、手はある

コレクションの一部をバーに持つてきている部屋がある  
それも裏口の近く

ただパスワードが必要だ

「イエローシャンパン」これだけ打つのに  
間違えなければ一秒で打てる

ただ、今は動搖、緊張、手首のけが  
この複数のマイナスによつて時間がかかっていた

カチカチカチ

あとは「パン」だけだ

距離は二メートル

イケる

と思つたが誤算だった

「飛びついてきた」

よりによつて脚にしがみつき、噛みついたのだった  
バランスが崩れよろけたスキに  
待つてましたと言わんばかりに、奴らがのしかかる  
耳はかじりとられ、腹からは内臓が飛び出し、喉も喰われて声が出

ない

「ハハつ、痛みすら感じねーな」と心の中で思った

視界は暗くなり、意識も遠のいた

そして深淵に引きずり込まれていった

一度と明けることのない暗闇に・・・

・・・・・

ウォードは途中化け物に遭遇したが、奴らの遅さと道の広さで相手にしていなかつた  
マシンガンの弾は切れて、愛銃のハンドガンだけを装備していた  
病院が見えてきた

「着いたぞ、バーの連中は無事か！？」「マスター生きて来いよ」と心中で思つた

そして、地獄の入口へ吸い込まれて行つた

## バイオハザード Chapter 1 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

まだ続くのは見ての通りです

あまり一つにまとめると疲れますしね

興味があったら次回も見て下さーへへ

感想、評価気軽に下さい

駄目だしかもうるさいです

## バイオハザード Chapter 2 (前書き)

### 第2話

かなり遅くなりましたが完成しました

まあ、適当に上から田線でreadしてあげて下さい

## バイオハザード Chapter 2

### Chapter 2

高くそびえ立つ病院

こういう時にはなおさら大きく見える・・・

夜は気温が下がり、「ヒュー」と風が流れるのを感じる

後ろからは奴らが追つてきているので、さっさと病院に入った  
普通の自動ドアは時間帶的に閉まっているので、非常口から入った

「ガチャリ」

鍵を閉めた

ウォードには考えがあった

病院の屋上にへりを呼び助けを待つという考えだ

すぐに救助を要請した

「こちら特別警察ウォードだ、この街は汚染されている」  
「人喰い病の影響だ、おそらく」「救助を要請する」

「分かった」「ただ、そここの病院なら少し時間が掛かる」

それを聞いた後通信機を切った

自動ドアに奴らが、張り付いている  
どうやら、非常口から入つてこれない事や、今までの行動からして  
知能は相当低いみたいだ

ただ、生命力、食欲といったものが著しく高い  
まず、銃を撃つても構いなく近づいてくる

頭を強力な武器で吹き飛ばすのが得策だらう  
まだ、奴らに関することはそれくらいしか分からなかつた

「さて、バーから逃げてきた皆を探すか」  
さつきから他の特別警察に連絡を取つてゐるが、返事がない  
女性警官ラムもそこに専属しているが、返事がなかつた・・・  
「みんな、無事だらうな」

「ここ」の病院は1階から10階そして屋上がある  
一つ一つウオードだけで生存者及びバーの皆を探すのは骨が折れる  
ので  
人手が欲しかつた

その時だつた  
「ガサッ」音がした

「誰だ!？」

ウオードは愛銃のハンドガンを構えた

「おいおい、撃つなよ」「バーから逃げてきたやつだよ  
「奴らかと思つて隠れていたんだ」  
その男の名前はマービン

少し拳動不審だが、まあいいと思った  
「マービン、これから俺とアンタでここ」の生存者を捜す  
「何もなければ、たくさんの生存者が見つかるハズだ」「病院だか

らな・・・

まずは1階からだ

ウォードが左半分、マービンが右半分を担当

マービンはマスターからハンドガンを貰っていたので武器は大丈夫

そうだ

「いいか！もし遭遇したら頭を狙うんだ」

「分かつたよ・・・はあー何でこうなったのやraj」

・・・

マービンは普通の会社員

子供が一人いるので本来休日である今日は子供と遊んでいないといけないハズだ

だが、妻と喧嘩をしてやけをおこしてバーで酒を飲んでいた

マービンは家族の事が心配で仕方がなかつた

本当なら今すぐ家族のもとに行かないといけないのだが

病院の外に出ることは、すなわち「死」を意味する

それを承知で助けに行こうとしたのだが、ウォードに止められた

「今は我慢しろと、あとで必ず助けるから」と

それに生存者を見つけヘリに乗つてポイントポイントに降りた方が効率がいいと言われた

「確かに最終的には家族が助かる確率が上がるかもしけないから我

慢だ」と自分に言い聞かせた

夜の病院は暗かつた

ほとんど見えず、緑の非常ランプが不気味さを際立たせるのに役に

たつていた

ガクガクと足が震えていた

病人のためのコンビニの所を通り掛かろうとした時だった

ゴソゴソと物音がした

マービンはへっぴり腰になりながら下手くそにハンドガンを構えた  
手の中は汗だくだった

「奴らか！？」

口から心臓が飛び出そうだった

バーから病院に向かう時、捕まつた人間がいくらかいた  
どうなつたのかは分からぬが叫び声がしたのが耳にこびりついて  
いる

どうなつたのかは分からぬ？

いや、死んだだろう  
奴らによつて

その奴らが今いると思つとパニックといつ言葉が可愛く思つほど動  
搖していた

が、出てきたのは人間だった

「つて人間かよ」とマービン  
安堵のため息をついた

「人がせつかく酔いをさますもん食つてんのによ・・・その銃でさ

めたわ」と男が言った

この後さらに奥を探索したが生存者を見つけられなかつた

死亡者もいなかつたので「ここは「ルイ」というの男しかいなかつた

．．．

時は少しさかのぼり

左側へ向かつたウォード

マービンを一人で探索に行かせたウォードは心配していた  
奴らと直接戦つていない一般市民を一人で探索に行かせるのはあま  
りにも無謀ではないか？  
と自問していた

特別警察である自分がここまで動搖しているからだ  
撃つても撃つても近づいてくる奴らは「恐怖」の塊でしかない

と思つたウォードは「いや、今は探索に集中しろ」と自分に言い聞  
かせた

だが、結局生存者は見つからなかつた  
死亡者もいないとこりを見ると先に上の階に上がつてゐるのかもし  
れない

それに、奴らはどうやらいないようだ

真ん中の集合場所に戻るとマービンが一人の男を連れてちゃんと戻

つていた

「マーク、無事だつたか！そつちの人は？」

「俺はルイだ、よろしくなおまわりさん」とルイが言った

集合場所の正面玄関の近くにあるガラスのカギのかかった自動ドア  
すでに多くの奴らがドアを叩いていた

バーの時より耐久があるので壊れはしないだろうと思つた

するとマークが「エレベーターは動かないな、階段を使うしかな  
さそうだ」と言つた

確かに左側を探索した時に見かけたエレベーターも動かなかつた

普通は動くはずだが・・・

仕方なしに階段を使い、2階の生存者を捜した

「ピシッ」ガラスにひびが入つていた

3階までは空間が1階まで見えている、つまり見上げたり見下ろす  
と1階や3階が見える

診察を中心とした1～3階のフロアである

もう一人生存者を発見した

リサという女性だ

看護婦で3階にずっと隠れていたらしい

「ん、ちょっと待てよ?」「バーの生存者じゃないのか!?」とウ

オードは思った

しかも、さつきから奴らが全くいないところを見ると病院内で彼女しか見つからないのもおかしい

「この上の階に何があるのか？」と思えずにいられなかつたリサも何も話したがらない、やはり何かある

4階

また、右側左側を一手に別れた

ウォード＆リサチームとマービン＆ルイ

戦闘能力を考えるとこの組み合わせしかない

マービンに通信機を持たせ、いつでも連絡できるようにしておいたウォード、マービン、ルイがハンドガンを所持して別れた

ウォードはじりみづぶしに病室を周つたのだが衝撃的だった

皆死んでる

血まみれだ！しかも奴らに噛みつかれた後ではないあきらかに第三者のせいだ

「リサはこの光景を見ていて、それで話せなくなつたのか・・・？」

と心で思つた

最後の病室もやはり残虐な絵が飛び込んでくるだけであつた

「ポタ、ポタ」

！－！－！「何だ！？」急に上から降つて来た液体にウォードは驚いた

「な、なんなんだコイツは！？」

「化け物」という表現がふさわしいにも程がある…。

全身真っ赤の皮膚に脳みそが丸見えで、舌がベロンと垂れているしかも、鋭い爪

戦闘のプロであるウォードは驚いた後すぐに冷静になつた

「んー？」

距離がほぼ真上の2～3メートルだというのに襲つてこない

「（）じつ、田が見えないのか？」

やはりウォードの直感はあつていた

静かに行動すれば問題なさそうだ

ゆつくりと足音を立てず右側に向かつた、マービン&ライの所へ向かつた

別れる所、つまり中心のところにリサを待機させ右側に向かおうとした時  
無線が入つた

「ウウ、ウォード化け、化けもんだ、たたたすけてくれ」と

「いいかよく聞け！絶対に物音をたてるなよ！奴らは田が見えな

い

「分かったよ・・・早く来てくれ」と小声でマービンは囁いた

奥の隅で向かつた奥から3番田の病室

奥の隅に一人でしゃがんでおり真ん中の天井に奴が張り付いていた  
こいつにまつくり来いとジエスチャーをした

まあ、ルイがゆっくりゆっくりとこちら側へ来た  
手や足がぶるぶる震えていたが何とかこちら側へ来ることができた

「ああ、マービン」ちだ」とウォードが仕草でやつた

そろつ

そろつと一歩前へ

しかし、上手くいかなかつた

奴のよだれがマービンの肩に落ちた時、マービンが驚いて叫んでしまつた

「ポート」

「……」「わや——ああああ

「しまつた!—」

「ルイ!!!ハンドガンの連射だ!」

ウォードとルイが二人でハンドガンを連射した

「バンバンバン」弾丸の嵐だ

奴は天井から落ちて動かなくなつた

耐久だけで言つなら奴ら人型の化け物より上だつた

これだけではすまなかつた

ルイが「おいおい、何だよあれ！」と病室から出て叫んだ

ウォードも病室から出て確認すると、それは地獄絵図だつた  
さらに奥の病室からわつきの化け物がぞろぞろ出てきた  
しかも、遠目にウォードたちが探索した左側からもぞろぞろ出てきて  
いる

どうやら繁殖して奴らの巣になつていたようだ

それがわつきの銃声で一斉に出てきたのだろう

「まずい！一人とも走れ」

幸い奴ら人型の化け物と同じで動きはのろまだつた  
リサと合流して5階に向かつた

・・・

1階のガラスには奴らの圧力で今にも壊れそうだった  
数にして500はいるだろう・・・

## バイオハザード Chapter 2（後書き）

第3話頑張つて作ります

いつになるのかな

## バイオハザード Another Chapter (前書き)

まず、タイトルのアナザーが「が抜けていてすいません

時系列アナザー、チャプター1、チャプター2となります

## バイオハザード Another Chapter

・・・

特別警察のメンバーは10人

元軍人であつたり、厳しい訓練を耐えて、筆記試験、体力試験など  
数多くの試練を乗り越えたものが所属できる、警察のスペシャリスト、そんな風にとらえてほしい

一人は、肉弾戦が得意でテロリストを数多く捕らえるもの

一人は、爆弾処理のスペシャリストであり数多くの爆弾を解除する  
もの

一人は、医療のスペシャリストであり数多くの薬品を調合し仲間を  
救つてきたもの

一人は、それら個性豊かな彼らをまとめるリーダーであるもの

・・・

休日になる2日前の事であつた

特別警察のリーダーである隊長のハイドは最近出勤していない

副隊長であり最年長のエドウインが今は仕切っていた

「最近の人喰い病、こいつを俺達で調査する」とエドウイン

ホワイトボードに人喰い病の事件が起きている場所が多数書かれていた

そこに2人～4人で調査にあたることになった

それそれが調査に向かった後、エドウイン達はある場所へ向かった  
わずかな手掛かりのもとに

その手掛かりといふものは、この都市の病院には恐らく地下が存在  
しており（もちろん一般市民は知らない）そこが今回の人喰い病と  
関わっている可能性があると思った

危険があると判断したエドウインは、マルコ（狙撃？2援後の？1）  
とテラ（医療？1）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）  
の4人で向かうこととした

他の場所はウォード（狙撃？1戦闘プロ）とラム（爆弾解除、キー  
ピック、医療）

レックス（各操縦のプロ）サム（重火器のプロ）ロイ（万能型）で  
各場所に散らばった

病院に着いたエドウインはいつもと同じ光景の病院眺めていた

「ここ地下に人喰い病に関する情報があるハズだ、気を引き締め

て取りかかるぞ」と言い

地下にいけそうな場所を4人で手分けして探した

小一時間探していると左奥の駐車場のコンクリートに不自然なあと  
があるとレイラから連絡が来た

「コンコン」と叩いていると、「カン」という音がする部分が見つ  
かつた

まるでマンホールの蓋を叩いたかのような音

その部分に体重をかけると、重みで反対側が浮き上がった

「地下だ！ハシゴがある」とエドウイン

4人は順番に降りて行つた

この構造はトンネルのようにある程度の広さがあり奥に続いている  
ような造りだった

薄暗く、肌寒いこの場所に4人は益々気が引き締まつた

4人とも、ハンドガンを装備して奥へ進んで行つた

・・・

「クククク、ヒントをやつたといつていいんだから着くまで遅い  
ぞ」「優秀な部下供よ

薄暗い地下に分かりづらいところに設置してあるだろう監視カメラで4人が侵入してきたのを監視モニターからハイドは待つてたゞと言わんばかりに見ていた

彼らはハイドの、特別警察隊長ハイドの裏切りにより地獄に招待された

これから、絶命を迎えることなど彼らは知らずに・・・

## バイオハザード Another Chapter (後書き)

アナザーといふことであつやつと読めるようにしました

ネタがないとかでは決して・・・

## バイオハザード Chapter 3 (前書き)

意外にも見て下さつてこられる方がいて、コメントまで残してくれると  
いつ

私もエネルギーを下さつた皆様の為にも急いで書き上げました^ ^  
気軽に見て下さい

## バイオハザード Chapter 3

・  
・  
・

4階の化け物を振り切り5階へたどり着いたウォード、マービン、ルイ、リサ

実際4人とも生存できたのは幸運と呼べる他なかった

いや、こんな状況で幸運などと言つ单語は存在しない！

目の前に人の形をした奴が3体

ウォードはハンドガンで頭を撃ちぬく

「バン、バン、バン」あまたの訓練で身に付いた正確な射撃技術は、奴らの脳天をきれいに撃ちぬいた

奴らは動かなくなつた

「ナースか・・・化けもんになつたんだな」とウォード

一般市民であるマービン達にはこの一瞬の出来事に睡然としていた

ウォードがいなかつたら、あつという間に丁度3人と3体でいい具合に料理されるに決まっている

現に銃を抜けなかつたのだから・・・

「お前ら、常に気を抜くなよ、死にたくなければ」

「ああ、すまねえ」とマービン

リサは4階の化け物にまだ驚いて震えている状態  
ルイは向でこんなことにして、ブツブツ呟いていた  
いずれにしてもこの状態はマズい

今後の探索に支障をきたす可能性が大だ

それに彼らに貸した銃には弾がほとんどないハズだ

ウォードはまだ数発に加え、マガジンが2つある

ここは自分一人で5階を探索する方が得策だと考えた

いつも時に、特別警察のメンバーがいてくれたらと思つ・・・

一般市民を決して馬鹿にしている意味ではないが

それに正直、ウォード自身も正常ではなかつた

テロリストの方が何倍もマジだ

メンバーがいてくれたらと思つた時にあることを思い出した

おどといの特別警察がそれぞれ、人喰い病の探索に向かつた時に

自分とラム以外のメンバーは帰つて来なかつたのを思い出した  
連絡も取れなかつたので、ラムと一人で彼らが探索に向かつた先へ  
行つたが彼らはいなかつた

それをふと思い出し、心配になつた

・・・

「クククク、やはり素晴らしい射撃能力だな」「ウォード」

特別警察はいた

10階の管理室、裏切り者の隊長「ハイド」・・・

「さて、1階のゾンビ共が侵入しそうだな」「ここはウォードの為  
にもちょっとした遊びをしよう」

ハイドは緊急ロックシステムを作動させ（警戒音なく）6階の階段  
へ続くシャッターを閉めてしまつた

・・・

5階には人型の奴らが数体いるだけで、生存者は0だつた

それに、もつと最悪なのが6階に通じる階段のシャッターが閉まつ  
ているということだ

5階に着いた時には開いていたのだから、第三者の仕業に違いない  
「」で働いているリサイわく、3階と10階に制御装置があるらしい  
緊急時に（火災や地震）どちらでも行けるように両方設置してある  
らしい

当然第三者は10階にいると考え、我々は3階にある制御装置でシ  
ヤツターを開ける必要がある訳だ

だが、「戻る」といふことはすなわち「死」を意味するかもしれない

4階の化け物だつてまだいる

奴らは聴力が劣っているため、乗り切れたとしてもそれでもリスク  
が高い

が、誰かがやらないと先に進めない

「俺しかないわな・・・」

ウォードが誰よりも先に言おうと思つた

だが、ルイが言つた

「俺は、機械関係の仕事をしてんだから」「俺しかないわな

恐怖への震えが隠し切れていない・・・それでもルイはそう言つた

特別警察であるウォードでもロックを解除できる可能性はある

「あんたが下に降りたら、誰が俺らを守るんだよ」トルイ

「ま、生きて帰るから心配すんな」「酔つているから遊び感覚で行つてきてやるよ」

「おー、待・・・」とウォードが言おうとしたそばから、ルイは下に降りて行った

ルイの言つてこむと正面

「こ」でルイを待つてじつと我慢した

「・・・くそつ

・  
・  
・

500体ほしるだらびンビの群れ

ガラスの限界が来た

「バリイイン」という豪快な音とともにゾンビが侵入した

やつと入れて人間の肉を喰える、そんなやる氣のある化け物どもこ  
見える・・・

・  
・  
・

#### 4階に下りたルイ

化け物どもがまだ大量にいるかと思つたが、全くいなかつた  
「巣に戻る習性でもあるのか？」と一人つぶやいた

「まあいい、3階に急ぐぞ」

3階に行く途中で人間の化け物には出くわさなかつたルイは  
自分はラッキーな奴だと思つていた

その考えはすぐに無くなるのだが・・・

3階に下りて驚いた、否、絶望した

「1階から3階は上と下が見えるよ」とながつてゐるフロアだ  
「見てしまつた」1階に侵入してゐる化け物どもを

数が尋常じやない

「なんだよこれええ！？」ルイはパニック状態

早い奴ではもう2階の階段を上つてゐる奴もいる

ルイは急いで管理室へ向かつた

この状況で精神を強く保ち、逃げ出さなかつた彼は称賛に値する

実際ルイが行つて正解だった

手早い動作でシャッターを解除する、*――*までは誰でもできる  
だが、ルイは思った

10階から閉められたのなら、解除してもまた閉められたら意味がない

ならば、3階から10階の管理室を操作できな<sup>い</sup>じくって  
やううと

ウォードにはできない機械関係の仕事人ならではの事をした

ただ、シャッターを閉めるのは違<sup>い</sup>10階を操作できなくする

いわゆる、妨害は時間が要するものだった

管理室に置いてあるパソコンをカタカタと懸命に操作している

ルイがいる3階の管理室も監視モニターはある

1階にいた奴らの半数は2階に侵入しているのが見えた

「もう少しだ・・・」とつぶやくルイ

3階に少し侵入してきた奴ら

「よしつできた!――これで10階からはシャッターの操作は出来ない

「俺以上の腕があれば別だが」

「ガチャツ」と管理室を開けた時「！」までか・・・と言つしかなかつた

両サイドから化け物が、人間を見つけたのを確認し一斉にこちらに向かってきた

瞬間的に管理室に戻つた

そこでルイはあるものをとりだした

ウォードがくれた手榴弾

もしかしたら予想していた、いやこうなることが分かつてウォードは手榴弾をくれたのだろう

さらに、奴らに殺されるくらいならと突破口より死に方をくれたのかもしれないと思つた

もちろんウォードは突破口として渡したのだが、今の彼は突破する気はない

安全ピンを外した

鍵を閉めていた管理室は、圧力ですぐに壊れ奴らの侵入を許した

「くつ、お前らも道連れだ」

「ズドオオオン」管理室から煙が上がり奴らは一緒に吹き飛んだ

勇気ある者と一緒に・・・

・・・・

爆発音がウォード達にも聞こえた少し後

ウォード達はシャッターが開くのを待っていた

「ルイ・・・」とウォードが呟いた時

シャッターが開いた

「よしつ行へばぞ！」

「おーおー、ルイを待たないのかー！？」とマーク

「待つ必要はない・・・

「おいつアンタそれでも警察か！？いや血の通つた人間かよ！？めずらしく口調の荒いマーク

だが、ウォードほひるまづ

「ルイは！ルイは俺たちのために犠牲になつたんだ！……進むしかないんだよ！！」ウォードも怒鳴つた

「何で死んだつて言えるんだよ！……分からぬだろ！……」

「手榴弾を渡した……」「あれは身を守るために渡したが、もつひとつ理由もある」「？？なんだよもう一つの理由って？」

「安樂死だ」「奴らに殺されるくらいならと渡しておいた」「俺としては突破口として使つてほしかつたが、今さつき爆発音が聞こえただろ」

「あれから、時間が経つてもルイはここに来ていない」「だから、死んだんだ……」

「アンタは」「うなる」とが分かつて行かせたのか……。

「誰がが犠牲にならないと先には進めないと……」「ウォードの怒りの口調はマーベンではなく、むしろ自分が言つてゐるのと思えた

それを感じ取つたマーベンはこれ以上何も言わなかつた

リサが「先に進みましょ」「彼の死を無駄にしたらいいけない」と言つた

「ああ、やうだな……」ヒウォードとマーベンが言つた

「わつきは熱くなつてすまねえ」とマーベン

「いや、頼りない俺が悪い……」ヒウォードがすぐに言つ返した

「うじてこの内にもゾンビたちは着々と上の階に侵入して行つていた

6階・・・

ここにも生存者なし

ついでに受付のカウンターの上にハンドガンが2丁あった

ここで身を守っていた人のだろう

ウォードはマービンからライターを借りて、わざとシャッターの前で物を燃やし

防犯システムを作動させシャッターを閉めて7階に向かった

500あまりある奴らを何分足止めできるか分からないがないよりはマシだろう

・・・

「ウォード、お前の判断はすばらしいな」「ハンターをプレゼントしてやるからおもむちにするといい・・・クククク、ハハハハ」

管理室はルイとかいう男のせいでシャッターが閉められなくなつた

ハイドも機械には相当強いのだから、驚いていた

監視モニターはきりんと働いているので、モニター越しからあるスイッチを押した

ハンターを2体投入した

「7階の侵入者を殺せ・・・・」











## バイオハザード Chapter 3（後書き）

作中で人型の化け物とかゾンビとか表現が異なっていますが

ウォード達は、もちろんゾンビという名前を知らない為人型の化け物と言っています

何か読み直して思ったんですけど、誤字脱字が意外にあつたりします  
出来るだけ修正をしたいと思いますが、前文などで理解していただ  
けると思います（反省）

一方、ハイドはゾンビを知っているためゾンビと呼んでいます

## バイオハザード Another Chapter 2 (前書き)

アナザーの第2です

時系列は小説に乗っている順番ではないので勘違いなさらないよう・

・

一応休日にウォードが巻き込まれ

その2日前の出来事を、アナザーとして書いております

あいかわらず上から目線で読んで下さい  
そっちの方が私としても気が楽です^ ^

## バイオハザード Another Chapter 2

人喰い病に関係しているだらうと思われる病院の地下

もちろん一般人は地下があることなど知らない

一般人が知らない地下

恐らく今回の調査で一番危険であるからメンバーも4人にした

エドワイン（副隊長）マルコ（狙撃？援後の？）とテラ（医療？）とレイラ（全てバランスのとれている万能型）の4人で向かうこととした

⋮⋮⋮

地下の奥

「ハイド様、ハンターに人工知能をつけたタイプ2ですが戦闘力はどうやって計るので？」

「クククク、今俺の優秀な部下がここを勘付いて向かってきている」

「だが、お前で計るとどうなるかな？」

「えつ、何をおっしゃるの……ギャあああああ

「フン、やはり凡人ではこの様か」

ハンタータイプ2はハイドの側にいた研究員を鋭い爪でひつかいて殺した

「クククク、もう少しで完成するこのGウィルス」「Tウィルスと  
いつ出来そこないとは違つ」

「これを俺に投与し、人間を超えた神になる」

「もう少しだ・・・」

ハイドは笑うのを止められなかつた

・・・

4人の背後にはハンター忍び寄つていた

「ザシユ」という音が鈍く裂かれた音をエドウイン、マルコ、テラ  
は聞いた

「レイラアア！－！」

「お前ら構えるんだ」とエドウインの合図とともに

銃弾の嵐が起きた

ハンターはしばらくじたばたしてすぐに動かなくなつた

レイラは即死していた・・・

頸動脈を切られ、血がブワワーと流れ出ていた

「クソッ！何だこの化けもんは」とマルコ

「先に進んで調べる必要があるな、マルコ後ろの警戒をもつと強めるようにしろ」とエドワインが言った

「ア解

しばらく進んでいると何かが近づいているのが確認できた

「一人とも前を見て」隊の中で唯一の女性テラが言った

ふらふらうちに近づく人がいた

「やはり人がいたか・・・だが様子が変だ、つかつに近づくなよ」とエドワイン

1メートル位まで近づくと人は急に足を速め、エドワインに掴みがかつた

「ぐつ・・・なん、だ・・・この力は」力の強いエドワインが押し倒されかけている

「撃てつマル」

「ズダダダダーン」マシンガンを連射した

やはりこの地下はおかしい

人喰い病と関わっているのは、間違いなさそうだ

この先も何体かこういう奴らを始末し進んで行つた

・・・

「さあ、完成だ・・・」

カプセルからGウイルスを取りだしたハイドは満足そうな顔をしている

プスツ

注射器タイプのGウイルスをハイドは腕から注入した

その時、研究員のゾンビがハイドの方へ向かつて来ていた

「ククク、ここはうかつに休憩もできんな」

今までも何体か襲つてきたが、全て頭を撃ちぬき問題なく対処していた

「今回は銃を使わない」とハイドは言い

ハイキックを繰り出した

ゾンビの頭に命中し何十メートルも吹き飛んだ

「……クククク、フハハハハ投与してから10分でこれが」「最高の気分だ」「

「しかし、ゾンビでは私の力は試めせんなあ」「お前りよ」とハイドは振り返った

「ハイド、こんな所で何をしていいの?」「テラが言った

「何をしていいかは身をもって体験しろ」

ハイドは瞬時にヒドゥインに近づいて蹴り飛ばした

体重の重いヒドゥインがフワッと浮き、ゾンビのように向十メートルも飛んだ

ズザザザザーと地面を滑る

「ゴホッゴホッ……何だこの力は!人間か!?」

「神だ」

次にマルコに向かった

マルコはマシンガンを構え撃つとするが、弾き飛ばされ掌打をくらわされた

テラはそのまま首を掴まれ、手刀を向けられている

「ヒュン」「テラの心臓を貫いた時、ヒドゥインがハイドにタ

ツクルした

「フン、貴様らの躊躇ないとこり・・・」「俺が教えた教育はきちんと出来ていいよつだ」

「普通は仲間に銃は向けられないものだがな・・・」とハイドはやはりゾンビ共でなくお前達でないと戦闘力は計れないと言いたげに笑った

「何をしているのかと聞いているハイド!」とハイドワイン

「クククク、まあいい教えてやる」「この街を明後日壊滅させる、これはそのための力だ」

「そこ」のカプセルに入っているのは、タイラント

「Gウイルスといふ究極のウイルスを投与して出来た化け物だ」

「病院の人間や街の人間を何百人と犠牲にしてやつと出来た一体だ」

「その究極のウイルスを私に投与し神になつた」

「世界中にウイルスを撒き、選ばれた人間だけの世界を作る」「その頂点が私だ」

「正気なの?アナタ・・・そんなバカなことは私たちがさせない!」

「クククク、強気だなテラ」「だが、そんな戯言は私を殺してから言え」

またハイドは消え、テラに近づいて掌打をくらわす

「うう・・・」壁に激突し、テラはうずくまつた

恐らくせりつ骨をやられた

側にいたマルコには肘打ちを顎に

ハイドワインには回し蹴りを当てる

「クククク、ビうした？私を止めるんじゃなかつたのか？」

懐からハイドはハンドガンを取りだし、マルコに向けた

「まあ、貴様うに生きていこから出られては困るから遊びはいきま  
でだ」

「バアン、バアン」

!!!!

ハイドの手からハンドガンが落とされた

「レックス、サム、ロイーーー！」テラが言つた

エドワインがハイドの元にたどり着く前、この三人増援を頼んでいた

「ナイスタイミングだ」とエドワイン

ポタポタハイドの手から血が流れれる

「クククク、流石は特別警察のメンバー手際がいい」

そう言つとハイドはタイラントの入つてゐるカプセルのスイッチを押した

「ブシュウウ、ガチャン」ゆづくとタイラントが出てきた

「さて、ここからだぞ貴様ら・・・」

「ザクシ、ブシュ、ドスツ」「ズダダダダアアーン」銃声が鳴り響く

激しい戦闘は意外にもすぐに終わった

・・・

特別警察 7人は壊滅

ウォードとラムに連絡が繋がらなくここに来なかつたのは不幸中の幸いかかもしれない・・・

## バイオハザード Another Chapter 2（後書き）

ラムのチャプターも考えております

彼女とウォードが通信できないのは、ハイドによる仕業です

特別警察の10人は、それぞれの連絡先を知つていて

それにより連携をとられたくないハイドが通信をできないうつじました

いわゆるハッカーミたいなものでハイドはそれに長けているということになります

それはおいで、感想や評価をよろしければ是非お願ひします

作者パワーが上がります^ ^

## バイオハザード Ram Chapter (前書き)

ラムチャプターです

全ての時間と並行して他のキャラが動いているって感じでしょうか

時系列 アナザー、アナザー2、チャプター1+ラム、チャプター2、チャプター3です

チャプター1とラムは並行しています

まあ、気軽に読んで下さい^^

## バイオハザードRam Chapter

ラムはおとといの特別警察の行方が知れなくなつたのを気がかりにしていた

携帯からも警察関係の人と連絡が出来なくなつてゐる・・・

通信は常にあけておけ、と学ぶ彼女らからしたら心配になるのも無理はない

休日である今日、ラムは人喰い病に備え射撃場に行つていた

25メートル離れた的をラムはベレッタ（ハンドガン）で狙つていた

ラムの愛銃だ

特別警察だけ所持している、ベレッタのグリップやフレームの色は通常のものとは異なる銃だ

さらに10人が10人でタイプの違うものを特注でき、ラムの場合

安定した命中をするためのカスタマイズが施されていた

近くから見ていたら、銃を構えるラムは美しかつた

「バンバンバン」

全て25メートル離れた的に命中

その時

「すげえ、すげえー25メートル離れた的に3連続」「しかも全て90点以上かよ」

隣から声が聞こえてきた

「姉ちゃんすげえな」「何かやっているのか?」と隣の若い男が聞いてきた

「ありがとう」「まあね、訓練つてとかしら」少しうれしげにラムは答えた

「俺の名前はカイン、あなたは?」

「私はラム、どうしてここに?」

「どうもいつも最近人喰い病の噂があるじゃねーか」「それに備えてんのー!」

「フフ、私も同じよ」

「ていうか、姉ちゃん何もんだ?あの射撃の腕は一般人じゃないことを吐露してるぜ」

「特別警察に所属しているの」

「...へえーあの警察のヒーロー軍団の人なのかなーそりあそらひ

驚いたよ」

「アナタは？」

「俺は元自衛隊だったけど、今は建築関係の仕事！」「自衛隊時代  
けがして彼女を心配させてな、引退したんだ」とカイン

「てか姉ちゃんのベレッタ、カッコいいな！特注か？」

「ええ、私用に使いやすいよう改造してあるの」

「なるほどな・・・そうだ！最近の人喰い病」「あれはどうなつて  
んだ？」

「おととい捜査に向かつたわ・・・だけビフ人が行方不明なの・・・

」

「私達が向かつた先に手掛かりがあまりなかつたわ・・・」

「そつか・・・」とカインが行方不明で心配だらうのに掘り返して  
悪いと思つたようなトーンで返事した

それから2人は事件の事やお互いの事をしばらく話していた

「ズル、ズル、ズル」背後からまるでズボンの裾をひきずつている  
かのような音がした

2人は振り返り確認した

様子がおかしい

## さつきの受付の男性

もともと受付の時から、体調がすぐれてなさそうだった  
顔色は青く、病人みたいな状態だったのに異常な食欲で何かを食べ  
ていたことを思い出した

「おい、姉ちゃん！これってまさか・・・」

「まだ、分からないわ」「止まりなさい！…」

ラムの呼びかけに全く応じず、男性はズルズルとうめき声を上げながら近づいてくる

1メートルの距離で突然カインに掴みかかつて来た  
「ヴワアアア」という声とともに口を開けて

危険だと判断したラムが男性の横腹に蹴りを入れた

ドチャと鈍く倒れ落ちた男性

「こいつ、俺を噛みつこうとしてきやがった」「人喰い病か！？」

まだ向かってくる男性にカインは発砲した

「バンバン」

右ひざに2発命中

だが、それがどうしたと言わんばかりに男性は近づいてくる

「！？ ハーーデリッシュことだ？なぜ動ける？？」

次に反対のひざを撃つたがまだ動いてくる

ラムが心臓を狙つた

「バン」

普通の人間ならば即死する、人体の急所を撃ちぬいた

が、まだ動く

「人喰い病で確定ね・・・流石に驚いたわ」

頭部にラムとカインが1発ずつ撃ち込みようやく動かなくなつた

「これ・・・街中の人間がなつたらヤバいよな・・・」

「その悪い予感は的中したわ、見て！」

ラムの携帯をニュースに通信した

カインの予想は見事的中していて、街の至る所に人喰い病と見られる症状の人間が多数いるというライブ中継がしていた

・ 人間とは呼べない、人間の形をしている化け物といった方が適当か・

ライブ中継の人も早く非難すればいいものの、巻き込まれて死亡している

「カイン、今から警察署に行くけどどうする?」「……たらいずれ巻き込まれるわよ」

「なら付いて行くよ」「姉ちゃん一人よりも、俺がいた方がいいだろ」

「まあね、ていうか嫌がつても連れて行くけどね」

「強引なこつて……」

今からここに射撃場から少しある、警察署に向かう

特別警察も所属している、もちろんだがラムの仕事場でもある

そこに行つて、警察官と武器を集め、人喰い病に対抗するという手段だ

車で20分、田舎暮れかけていた

車に乗つている途中、何人かふらふらしている人間を見たが恐らくは人喰い病の化け物だろう

「カイン、さつきから何をそわそわしているの?」

カインが少し落ち着かない様子を見てラムは聞いた

「いや、な……」「病院で働いている彼女が心配でさ……リサつ

て言つんだけゞ

「なら、先に病院に向かいましょ、」

「すまないな、恩にさるよ、」

この都市一番の病院に急きよ向かうことにした

日は暮れ、空が暗闇に包まれていった

病院の所で車を止め、入口から入るうと思つていた

だが、入口に大量の化け物がいた

まるで、誰かを追いかけて来たかのよう」・・・

「これじゃ無理ね・・・やつぱり警察署に向かってヘリで屋上から  
向かいましょ、」

「だな・・・悔しいけど死に行くようなもんだからな、」

ラムは、カインが冷静で助かつたと思つた

彼女が心配だから、それでも行かせろと言いだすかと案外思つて  
いたが違つて良かつた

特別警察の中では操縦を得意としている者がいる

レックスというのだが、そのレックスのヘリを使って屋上に止め  
ば病院に行ける

特別警察は全てのメンバーがヘリを運転できる

ラムも例外ではなかつた

警察署

街の安全を守るこの機関も、入る前からなんどなく頼りなく見えた

車から降りたらムとカインは正面玄関から警察署へ入つて行つた

・  
・  
・

「ラム・・・お前にはタイラントを用意してやる」

「ウォードは私が相手をしてやりたいからな・・・クククク

「生きて病院の屋上に来れたなら相手をしてやつてもいいがな・・・

」

映像越しにハイドは静かに笑つた



## バイオハザード Ram Chapter (後書き)

今更ですが、この話から読んでくれた人も、最初から読んでくれている方も

両方ともありがとうございます

よろしければ是非感想を書いてください（評価も）

チャプター4はもつ少しで掲載しますので、今しばらくお待ち下さいな^\_^

## バイオハザード Chapter 4（前書き）

久しぶりの投稿です

毎回安定して何十人の方に読んでもらえるにはどうしたらいいんでしょうかね？

まず、検索かけても出でないこの話をビックりして皆さんは読んでいるのか？

という疑問が生じました^ ^

## バイオハザード Chapter 4

7階に向かった、ウォード、マービン、リサ・・・

ここに来るまでに1人を犠牲にした

警察である、しかも特別警察であるウォードはかなりの責任感を感じていた

ただ、前向きに落ち込んでいて「もういいや」とか「俺には何でもできない」とか考えず

「次はこの一人を絶対に死なせない」とポジティブを考えていた

その時「ガシャーン」という激しい音がした

「何の音!?」リサは動揺を隠せない

「俺が見てくる」「一人はナースステーションの中で隠れていってくれ」

どの階でもそうだが階段を上がってすぐに、受付があるナースステーションがある

そこのかウンターの中に、マービンとリサは身を潜めた

それが罷だと知らずに・・・

・・・

「クククク、やはりウォード」「お前はその2人の為に身を挺して探索をしたか・・・」

「それが罷だがな・・・」

ハイドはハンターを1体だけ奥へ待機させ、大きな物音でウォードをおびき寄せた

もう1体をウォードがいない間に、ナースステーションに送りこんだ

悲鳴を聞こづが、ウォードが1体のハンターと戦つていれば

そう簡単に救助に向かうことはできない

ハイドは静かに笑っていた

「お前くらいは生きてここに来いよ・・・ウォード」「後は死んで  
かまわん」

・・・

「ここにも生存者なしか・・・もう生き残りはいないかもしけんな」とウォードはつぶやいた

人型の化け物は数体いたが、距離をとつて落ち着いて対処すれば丈夫だった

大体、こんな奴らにいちいちびっくりしていれば守れるものも守れない

物音の原因はまだ発見していない

新手の化け物かもしれない、そうウォードは思い警戒を強めた

やはり生存者はいないか、と最後の奥にある病室から出た時だった

目の前に、見たこともない化け物がいた

緑色の皮膚に爪をもつ、両生類のような化け物・・・

「お前が、物音の原因だったか・・・」妙に冷静な自分にウォードは驚いた

落ち着いて、ハンドガンを構える

狙いを定め引き金を引こうとした瞬間、化け物は飛びかかって爪を振ってきた

「！－！速い」 ほぼ反射神経でよけたウォード

的確に首を狙つてきた化け物、当れば即死だ

「バンバンバン」 3発頭部に撃ちこんだ

が、少しごらついただけで倒れなかつた

「ちっ、やはり奴らよつてじぶとか」と呟いた時だつた

「あああああああ」リサの悲鳴が聞こえてきた

「リサ！？何が起きた！？！」

少しの隙をハンターは逃さずウォードに飛びかかった

ウォードを爪は避けたものの、そのままのしかられた

「グッ・・・なんて力だ」

片方の手でウォードの胴体を押さえつけ、もう片方を振り上げそのまま下ろすとじている

「い、こつ・・・」押さえつけられた手が振り払えず焦りを感じていた

リサとマービンも心配だが、そんなこと、いや、そんなこととは言つてはいけないが

そんなことを考へてゐる余裕はない

正確に首を貫くとしている手は、狙いが定まつとしている

しかも、両腕を押さえつけられていて銃が使えない

「オラアアアアアーー」と叫んだウォードは運身の蹴りを繰り出した

だが、ハンターは吹き飛ばず、少し持ち上がつただけだった

しかし、振り下された爪はウォードの首から一〇センチのところ  
で止まつた

ウォードはそのまま体を回転させ、ハンターを振り落とした

転倒したハンターをハンドガンで頭を撃ちぬいた

「バンバンバン」

ハンターはやつと動かなくなつた

「ハアハア、二人は無事か！？」ウォードは一人の元へ向かつた

・  
・  
・

ウォードがハンターを倒す少し前、リサとマービンの前にハンター  
が現れた

「なんだこの化けもんは！？」とマービンが言った

「何よ、この化け物・・・」リサは口に手をやつて驚いていた

ハンターは低い声で鳴き、マービンに飛びかかった

「ザクッ」

マービンの肩を思い切り抉つた

「わあわあわあわあ」「マービン……」リサは絶叫する

かろりじて首への命中は免れたが、肩を抉られ血が出てきている  
「くそつ次から次へとせじいもんだぜ」マービンは片手でハンドガンを発砲した

「バンバンバン」「バンバンバン」「カチャ、カチャ」・・・

・・・弾切れだ

ウォードもまさかこの中央のナースステーションにこんな化け物が出でくるとは思つてもいないので2つあるうちの1つのマガジンを渡していいない

人型の化け物なら6発もあれば1～2体くらい身を守れると思つた  
からだ

「万事休すか・・・ってカリサ?」「おい、リサ!どこへ行つた?  
リサー」

つこわつきまでいたリサがない

ハンターはマービンとの距離を縮めていった

「くそつ、ここまでか・・・家族に会いたかったな・・・」

ハンターは観念したか!と言わんばかりに低く鳴き、爪を振りかぶ

つた

「ズヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ」強烈な銃声がした

マービンは構えていた両手の隙間からつぶつていた目をゆっくり開けた

「リサー！アンタが助けてくれたのか！」

リサは逃げていたわけではなかった

どこかに武器はないかとナースステーション内を探していた

結果30秒という短い時間でマシンガンを見つけた

彼女の幸運にマービンは救われた

その時ウォードも合流した

「二人とも無事だったかーマービンー」「へそつ間に合わなかつたか」

「生きていらるぜ」「だから間に余つてゐよウォード」とマービン

10分間、休憩をしてマービンはリサに包帯を巻いてもらつた

命に別状はないみたいだ

ウォードはいつも推測した

10階で監視している奴は、頭の切れる奴でしかも

わざわざのよじな化け物を操れる・・・

あのタイミングで化け物が2体現れれば、自然に出てきたという線  
は消える

つまり、人喰い病に関わる重要なやつに違いないと考え

「捕まえて聞き出す」と言ふウォードは

「8階に行こう、もう少しでヘリも到着するんだ」とリサとマー  
ビンに言った

現時点で感染するといふことを知らない彼らは

感染した、否、感染してしまったマービンを連れ8階へ上った

奴らから攻撃され、傷口からウイルスが入ると奴らと同じになる  
ことを知るのはもう少し後だ

・・・

「クククク、ウォードはやはり倒したか・・・いや、それよりも一

般人2人が生き残ったのは意外だったな

ハイドは、残念そうかうれしそうかどちらか分からぬ表情をして  
いた

・・・

## 8階

もつ生存者はいなんじやないかという先入観のせいで探索する気が失せかけていたウォードだが

警察である自分がそんなこと思つていてはいけないと心にムチをうつた

またマービンとリサをナースステーションに待機させるのは危険だと思つたが

連れて行つても、マービンの状態が状態なだけに連れていくのはもつと危険だと思った

マシンガンがある、それと一人を信じて8階の探索に向かつた

まずは左側

下の階でもそうだったが、数体の化け物がいて様々な殺され方の死体がいくつもあった

「ここつも、噛みつかれて死んでいるな・・・」

「ここつは、貫かれた痕だ・・・」

「ひうー」とこうため息声でウォードは振り返った

人型の化け物が一体ゆらゆらと近づいてくる

「またか・・・」

「力チャヤ、バン・・・」薬莢が一発で、銃口から煙があがる  
脳天をぶち抜くことによって一撃で倒せると氣付いたウォードが狙  
わない手はない

さっきから、銃弾によつて殺された人間の死体がちらほらみえる・・・

「10階の奴のしわざか？・・・」

そう思いながら左側の探索を終えた

次は右側

ハンドガンの弾はマガジンを含め30発

9階、10階の分を考えると無駄には出来ない

出来れば、舌の長い奴や緑の両生類とは戦いたくない

部屋に入ると奴らがいた

「3体・・・しかも死体に喰らいついているな

こんな数を相手にしていては弾がもつたいないと思い振り返りつつと  
すると

奴がいた

「チツ、どこから現れるんだよ」ウォードは銃を構えたしかし、後ろの3体にも気付かれてしまった

「バンバンバンバン」1、2、3、4体全て撃破！

その腕前は流石特別警察射撃？1と言わざる得ないわずかに位置がズレたら、頭部でも一撃では死ない

頭部の中でもさらに弱点の部分をたったの一撃で撃ちぬく彼の腕前は称賛に値する

その直後、ウォードは驚かされる

さつきまで3体に喰われていた死体が動き出した

「何！？死んでいたハズだが・・・」

「バン」その直後「バタツ」とゾンビが倒れる

「・・・奴らに喰われると・・・いや、奴らの成分が何かが入ると奴らのようになるのか？」

「！だとしたらマービンは！・・・」「マズい早く戻らないと2人が！」

急いでナースステーションに戻った

「ハア、無事か・・・」と安堵のため息をついたウォード  
「ウォード、わざわざからマービンの顔色が悪いの」「それもどうぞ  
んひどくなつていろ」

「ハアハア、ヤベヒんだウォード」「お前らが美味そつと見える・  
・喰いつきたくて仕方がねえ」

「マービンじつかりしりーー！」

「駄目だ・・・腹減つた・・・人間の肉がほ、し、、い」マービン  
は言葉をろくにしゃべれていない

「ハハハハハハ」「奴らと回じよつてマービンが襲いかつて来る

「クソつー離れろリサ」ハンドガンを構えるウォード

「バン」

マービンは動かなくなつた

10階の奴に激しい怒りを覚えた

「化け物を送らなければ」「んなことこまへ・・・絶対に捕まへるーー！  
ーー！」

ウォードは壁を思い切り殴つた

そして、9階へと向かって行つた

・・・2人犠牲にした、警察のウォードは市民を守れない悔しさと怒りで溢れていた

## バイオハザード Chapter 4（後書き）

ありがとうございました

誤字脱字がありましたらお問い合わせ下さい

## バイオハザード Ram Chapter 2(前書き)

ラムチャプター2です

ラムチャプター1に比べ長いですが、よろしくお願ひします^ ^

## バイオハザードRam Chapter 2

警察署

街の安全を守り、犯罪者を捉える、市民からしたら頼もしい組織だが、その警察署は今はとても頼りなく見えた

正面玄関から、ラムとカインは入って行つた

「！…！あれば！？」ラムが真っ先に反応した

少し奥で、警察官が倒れている

「大丈夫！？他の皆は？」

「つう、アンタはラムか…ここも危険だ…早く逃…」

これ以上警笛はしゃべらなかつた

「まだ生存者がいるかもしねーから探そうぜ」とカイン

「そうね…諦めずに探しましょ」

「俺は中の構造知らないから頼んだぜ」

まずは、特別警察の部屋に向かつた

途中化け物になつた警察官がいくらかか襲つてきたが問題なかつた

「やつぱつ監いないわね・・・」メンバーがもしかしたら仕事場の部屋にいるかと思つたが違つた

武器をしまつてゐるロッカーから、ショットガンと弾薬、マシンガンと弾薬入手しておいた

「防弾ベストもしておかないとね」

「くつー！」ただけ武器があつたら十分だけどなー。」

「油断しない」とゆ

IJJの警察署の仕組みは地下1階、地上1～3階といつ構造になつてゐる

地下には牢獄がある

「地下に牢獄があるわ」「そこならまだ生存者がいるかもしれない

「いいのか？ 犯罪者じゃないのか？」

「やうだけど・・・ほつとけないでしょー？」

1階は1通り捜し終えたので、地下に向かつた

だが・・・

牢が全て開いてゐる

血まみれで・・・

「誰が・・・?」いくら人型の化け物でもここまで出来るわけがない現に今までの警察官の化け物も、ここまで損傷していなかつたからだ

「おいおい・・・あれを見ろよ」カインが声のトーンを落として言つ

原因が判明した

警察犬

捜査と一緒に連れていく警察犬

それが化け物になつてゐる

納得がいつた

あの発達した牙はこれらの死体をいつこづ形にするのに適している

「6匹・・・マズいわね」

「まだ刺激してないからか知らんが動きが鈍い」「セーので牢屋に逃げるぞ」

「セーの!!--!」

バタン!!--!

カインとラムは急いで牢屋を閉めた

その瞬間、牙をむき出しに化け物犬が向かって来た

あまりにも猛スピードで突撃してきて牢屋が壊れるかと思った

いや、壊れそうだ

「おい、姉ちゃん、この牢屋壊れるぞ・・・」

「・・・みたいね」と若干のんきに答えた

「まあいい、反撃だ！」

カインはショットガンで化け物犬を撃つていった

ラムがマシンガンを構えた時だった

「！」「何かに脚を掴まれた

化け物ー！こうこうと机に生き返った

「力、強いわね！」

「ラムーーー」カインはいつも姉ちゃんと呼んでいたが今は違った

ラムは噛みつかれないようになるので精一杯だった

振りほどけない

ブーツを履いているから簡単には噛みつかないが、油断は禁物

「くそっ弾切れだ」カインはラムの様子に気づいたと同時に弾を切らした

このままじゃ檻が破られる

と思った時

ヒタ、ヒタ、ヒタという音がした

「……何よコイツ」

天井の換気扇から舌の長い化け物が出てきた

「シユツ」

カインの首に巻き付いた

「カイン！――」

見ていて物凄い力で撒きつかれているのが分かる

2・5メートルの高さにいる化け物は口を開けて持ち上がったカインを食そりとしているのか

ゅっくりカインが持ち上がりしていく

「グ・・・クツ」

選択は3つ

カインを助ける、化け物犬を倒す、脚を掴んでいる化け物を倒す

カインを助けるが優先順位なのだが、檻が今にも壊れそうだ

だからといって化け物犬を撃つていてはカインが助からない

だが、自分の脚も噛みつかれるとマズい

恐らく、噛みつかれると自分も化け物になる

それは今までの警察官の傷からしてそうだ

!!!

手に持っているマシンガンを上に投げた

ラムはとっさにカインの脚からハンドガンを抜き取った

ハンドガンの2丁銃

一見マシンガンの方が強そうだが

2丁なら2つ同時に行動可能だ

力チャヤ、力チャヤ

脚の化け物と天井の化け物に向ける

バンバンバンバンバン

空になるまで撃ち続ける

脚の化け物も天井の化け物も動かなくなつた

フワツとマシンガンが落下する

とその時、2匹の犬の化け物が檻を破る

ラムはスライディングキャッチでマシンガンをとる

「終わりよー！」

ズダダダダダダン

一網打尽にした

犬の化け物も殲滅した

カインがショットガンで頭数を減らしてくれなかつたらヤバかつた  
がなんとかなつた

ドサツとカインが落ちた

「ハアハア、ゲホゲホ」

「大丈夫？」

「ああ、助かつた」「ていうか今の行動映画でしか見たことない…」

・ゲホッ

ラムの手を借りカインが立ちあがつた

地下も1通り捜したが生存者はいなかつた

そのまま2階まで進んだ

2階の生存者を捜している時だつた

「ペペペッ

ラムの通信機が光つた

「ラム！良かつたせつと繋がつた

「ウォードー？無事なの？今ビートルの？？」

「病院だ」

「病院・・・！」カインが反応する

「もう知つて居ると思つが、24時に爆弾が投下され

「おこおこマジかよ・・・」ラムより先にカインが驚く

携帯の一コースを見る余裕がなかつたから分からなかつた

「もう少しで屋上につく、そこでヘリを要求して脱出するつもりだ

「ラムはどうする？」

「私もヘリで脱出するわ」「その前にカインと病院に行くから合流できない?」

「分かつた!生きて来いよ」

「ええ!またあとで」

ブツンと通信を切った

「リサは無事なのか?・・・」カインは呟いた

2階、生存者こそいなかつたがかわりに不自然な傷を見つけた

人型の化け物、化け物犬とは違う傷

まるで鋭い爪に切り裂かれたような傷

「嫌な予感がするわ・・・早く進みましょう」

「だな・・・第三者の化けもんがいるみたいだ」

そう・・・予感は的中する

3階

奥には外に出るドアがあり、そこにヘリが3機ある

3階の生存者を捜して脱出できる

驚いたことに、1Jの階には化け物がいなかつた

代わりに生存者が2人いた

ジョンとロゼッタ、新米警官だ

恐怖で今まで3階の物置に隠れていたらし

とにかく生存者が見つかって良かつたと、これでヘリの所へ向かつた

ヒュオツと風が入り込み外へ出る

3階からは、ある程度街が見渡せるが酷いものだつた

あちこちで叫び声、化け物共がウヨウヨいた

ラムはヘリの所に向かいエンジンをつけようとした時だつた

バコン！……と勢いよくドアが吹き飛んだ

!!!!!!

「コイツが……」ラムは呟いた

「ヒィィィ」と2人の新米警官

「こんな奴を相手にすんのか……」カインは驚いていた

タイラント

「こつはもむろんハイドの刺客なのだがラムは知らない

特別警察を壊滅させた化け物

「デジロ」

ロゼッタはタイラントの鋭い爪で首を引き裂かれた

ジヨンの体に血が飛び散る

「あああああ～～」ヒジヨンは精神崩壊寸前だった

そんな弱い人間はいらないとばかりにタイラントはジヨンも引き裂く

「デジロ」

「あの爪・・・あたるとマズイな

「油断しちゃだめよカイン」

「カチャ」2人はマシンガンとショットガンを構える

ダツとタイラントが距離を詰めようと駆け出した

！！！「速い！想像以上だ」カインは次に爪をなぎ払うだろうと予測して横に転がった

案の定タイラントは爪をなぎ払う

なぎ払った時の風でカインの髪が揺れる

ズドン、力チャヤ、ズドン、力チャヤ、ショットガン2発を顔面に

ズダダダダダダン、背中にラムのマシンガン

「効いてないのか！？顔だぞ！？」まるで堪えてないタイラントに2人は驚く

通常ショットガンを数メートルの距離で（あまり離れててはダメだが）撃ちこむと人型の化け物はあるか、犬の化け物でも頭部が吹き飛ぶ

それは今まで良く分かつっていた

しかし、田の前にいるコイツはそれがどうしたと言わんばかりにビクともしていない

諦めず、ショットガンをカインが撃ちこもつとした時

左手の鋭い爪攻撃が命中した

「グフツ・・・ズザザザザと地面を滑る

腹部に当つた爪は次は防弾ベスト」と破壊するだらうことを物語る

「あーー効いたわ・・・なんて威力だゴホッゴホッ」

恐らく左利きであろう化け物、左手を使った攻撃のスピードは尋常じゃない

ズダダダダダダン、ラムは背中にまだ撃ちこむ

標的がラムに変わった

8～10メートル離れた距離からタイラントが攻撃の動作にはしる

ダンヒジヤンペして距離を詰める。

「ツツー！」

ブンツと必殺の左手

これはかるいじてしゃがんだ

だが、左手と比べあまり発達していない右手、それで襟を掴まれた

そのまま、力任せに投げつけられた

## ラムは壁に激突

目を開けた時には左手が振り下ろされようとしていた

「調子に乗るなアア」カインが叫びタイラントにタックルした

グラつくタイラントをラムは見逃さない

狙いを定めている暇はなかつたので闇雲にマシンガン

ズダダダダダダン

ようよるとタイラントはしていた

「ねえカイン、弱点はもしかしたらむき出しの心臓じゃない！？」

「かもなー試す価値はある」

「援護頼むぞラムーー！」

「任せてーー！」

カインがタイラントに突撃！

タイラントは爪を振り下ろす

だが、ラムのマシンガンに阻まれる

ガチャ、ズドン

ショットガンが心臓に1発

ガチャ、ズドン

もう一発

タイラントは叫んでいた

「ラムーー一緒にあいつたけ撃つぞ！」

「ええーー！」

銃弾の風が心臓に鉛の弾を埋め込んでいく

心臓を抑えたタイラントは苦しそうに倒れていった

「やったな！」

「わうねー！病院に行きましょー！」

ラムはヘリのエンジンをつけへりを飛ばした

生存者を見つけたが助けられなかつた

悔しい思いと、誰がこんな事件を起こしたのかと怒りの思いでいっぱいだつた

・ · ·

ムクリ

タイラントはゆっくりと起き上がつた



## バイオハザードRam Chapter 2(後書き)

読んで下さりありがとうございます

感想、評価、ぜひお願いします^ ^

# バイオハザード Final Chapter（前書き）

いよいよ最後のお話です

アナザーはアナザー

ラムはラム

本編は本編で呼んだ方が話の内容を覚えていやといかもしません

それではどうぞへへ

## バイオハザードFinal Chapter

9階

つにこじこまで来た

10階にこじの事件に関わっている者がいる

「ん？ 通信機が使えるようになつていてる」

今まで使えなかつた通信機が使えるようになつていていた

すぐさまラムに連絡した

ピーピーピー

力チャ

「ラム……良かつたやつと繋がつた」

「ウォードー？ 無事なの？ 今どこにいるの？」

「病院だ」

「もつ知つてこむと思つが、24時に爆弾が投下される

「もつ少しで屋上につく、そこでヘリを要求して脱出するつもりだ

「ラムはどうする？」

「私もへりで脱出するわ」「その前にカインと病院に行くから合流できない?」

「分かつた!生きて来いよ」

「ええ!またあとで」

ピッ

「カイン、他の生き残りもいるのか!良かつた」

ピーピーピー

「またか!?誰だ?」

力チャヤ

「お前が読んだへりはもう来ない・・・追撃したからな」

ガチャリ

声が変わっていて人物が特定できなかつた

ウォードはへりを救助に呼んでいた

恐らくそれが何らかの方法で来なくなつたのだらう

十中八九10階の奴の仕業だ

「どこまで人を馬鹿にしたらいいんだーー！」

ウォードは怒りに怒った

9階を1通り調べたが、死体や化け物、両方いなかつたところよりは無人といった方が適切だった

「くそつ生存者なしか・・・」

「次は10階よ、気を引き締めて行きましょう」とサ

「ああ、アンタだけは死んでも守るよ」

コンコンコン、慎重に階段を上がつて行つた

10階

誰もいない

ここに事件に関わっている奴がいるハズだ

「よく来たな・・・」

「……」の声、ウォードはどこからしたのか分からぬ声に警戒した

「ウォード、流石だ」「貴様はやはり見込んでいただけはある

「ハイド……」「お前がここにいるーー？」

「ククククク貴様の働きは大したものだつた・・・」

「最近警察署も行かずに何をしていた！？」 ウォードの口調が荒い  
「何をしていたのかは身をもつて体験しろ！…他のメンバーのよう  
にな」

「お前がツツ！…メンバーを殺したのかツツ！…！」

怒りの頂点と言つた方が適切か

ウォードは自分でも分からぬくらい怒つていた

「正確には俺ともう一つの兵器でな・・・今頃ラムが戦つているん  
じやないか？」

ウォードの怒りは限界だった

力チャ、バンバンバン

容赦のないハンドガン

だが

！！！

「全て避けるだと！…あり得るのか・・・」

「ああ、神だからな」

ハンドガンの弾をウォードが引き金を引く瞬間を狙い避けるハイド

常人には到底不可能！

「リサア……マシンガンだ……こいつだけは許さない」

「クククク、そこまでとつ乱した貴様は初めて見るな」

フォンと流れるようにウォードに近づきハイドは掌打

フワッ

ウォードは吹き飛んだ

「…? ?」

壁に激突

「グフっなんだこの力は！？」

「クククク、神の力だ」「他のメンバーよりは楽しめてくれよ」

カチャ、バンバンバン

ウォードは起き上がりハンドガンを撃つ

シュッシュッシュッ

全て避けられる

物理法則など完全無視をしているかのようだ

銃弾を避けるなど、1発目がからうじて出来てもこの距離で何度も出来るわけがない

しかも、弾切れだ

「その程度か！？」

ハイドはウォードの腹部を蹴り、首を掴む

逆の手は手刀で突き刺すよ

「ああ、ここからどうする？..」

ズダダダダン

「グッ・・・」

リサが背後からマシンガンを撃つた

ハイドの背中に命中した

「貴様・・・・」

いくら銃弾を避けられるといっても背後からは無理だと、それが分かるだけで十分だ

このチャンスをウォードは逃さない

ハイドの顔面をありつたけ殴る

バキッ、バキッ、ゴキッ

パン、ハイドがウォードの拳を掴む

「図に乗るなよ・・・」

ぐるんとウオードの手首を返し蹴り飛ばす

「クククク、ここまで生き残った女なだけある」  
「背後からマシンガンを撃つとはな

「お前から殺すよ女」

ズダダン、ズダダン

リサはマシンガンを正面から撃つが、やはり正面からでは当たらない

カチヤ、ハイドはハンドガンを懐から抜き取り構える

「ハイドオオ……」ウオードはリサを死なせたくない一心でハイドに抱えついた

「！！！クツ邪魔をしやがつて」

「リサ！撃て！！俺に当つても構わん！……！」

「……」何の抵抗もなくリサがマシンガンを撃つたのは冷徹だからで

はない

むしろ、ここまで来るのに犠牲になつた2人や被害者、ウォードの覚悟を感じ取つて

ありつたけのマシンガンをハイドに撃ちこんだ

ズダダダダダダン

羽交い絞めした時、腕にいくらかマシンガンが当つたがウォードは痛みを感じていなかつた

激しい怒りを感じていたウォードに「痛み」という生ぬるこものは効いていなかつた

流石に何発も撃たれたハイドはフラフラしている

「クツ、・・・貴様ら・・・」

ハイドもここまで追い込まれるとは思つていなかつた

手刀をウォードに向ける

「死ねH H」

ドスつ

あまりにも速すさの手刀にウォードは避けることが出来なかつた

ボタタタタ「グツ、・・・はづ」口から血がこぼれる

腹部に突き刺さった手

だが、ウォードはハイドに拳を放つた

バキヤ、バキ、ボコッ

何発も何発も

「図に乗るなああ」「殴られながらもハイドはそういう

もつ狂方の手もウォードに向けた

そして

ドスツ

「！？」ハイドは驚く

ウォードは手刀を左手で受け止めていた

貫通するといづ形で

しかし、手に貫通しているが首を突き刺されるのを回避した

「ハイドお前の好きにはさせん……」

特注のウォード専用ハンドガンを右手に持ち思い切り殴りつけた

ガツンッ

ハイドの頭から血が流れる

それと同時にお互いが離れる

ズボツ

ハイドの手がウォードの体から抜けた

「ハアハアハア」お互いの息の切れ方は体力ではなく怒りによるものだった

ウォードの腹部からはドクドクと血が流れ出る

「アハッ・・・、ハアハア」口から吐き出す血

「苦しいか！？ウォード、その苦痛から解放してやる」「死といつ  
かのなー」、どこかしき言わなくとも分かった

「アヒーリで」

リサがない

「いたな時にアヒーリ・・・

「心配するな、逃げただけだ」「すぐ見つけて貴様と同じ所にお  
くつてやる

その時だった

Hレベーターのドアが勝手に開いた

と同時にバタン

管理室のドアが開き

「ウォードーそこつをそこに押し込んで……」リサが言った  
「どうやらHレベータを開くよつとしたのはリサだ

ズダダダダン

リサが残りの弾を撃ち込む

これ以上マシンガンに当つてしまはずいと判断したハイドは弾を避けた

その後、背後からウォードがもう一発銃で頭を殴る

ガツン

「グッчи、貴様アア」

やつと出来た隙をウォードは逃さない

Hレベーターにハイドを投げ入れる

「なんのつも・・

Hレベーターのドアが勝手に閉まつた

「ウイイイン」という音でエレベーターは下に降りた

「一階に送りこんでやつたわ、しかももう戻れないよつてエレベーターの電源を切る」

と言つたりサはもう一度管理室に入つてエレベーターの電源を切つた  
「アイツらの餌になりなさい……」

管理室から出たりサはすぐにウォードに駆け寄つた

「大丈夫！？歩けそう？」

「いや、手を貸してほしい」とボロボロになつたウォードは言つた

そして、そのまま屋上に向かつた

数分ほどすると、ヘリがやつて來た

「ウォード！？大丈夫？」ラムが駆け寄る

「ああ、何とかな……」

「リサ！？無事か？」カインはリサに駆け寄る

「カイン！？」リサはカインに抱きついた

「爆弾投下まで30分、セーフね」とラムが言つた

「うして皆へりに乗り込んだ

残念だが、もう他の生存者を捜している余裕はなかった

あと1~5分で爆弾が投下され、街がなくなる

活気あふれた街は一晩で崩壊しようとしている

こんなウイルスを私欲に使つたがために

・・・

ヘリに乗りながらウォードは思つていた

この長い夢は、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか

普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚

気を抜くことすらできない

大切な人は死に、街は一晩で壊滅

人間の形をした化け物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる

「生き残る」

その言葉は何よりも重い気がしたのだ

俺の中での一生のトラウマであり続けるだろう・・・・・

・・・

Hレベーターのドアが開き1階に無理矢理着いたハイド

田の前にはゾンビの群れがいた

一斉に「さうに向かってくろ絵はまさに地獄絵図

「ククククク許さんぞ貴様ら、必ず殺してやる」

END . . .

ペーペー・・・

Next

Seven Survivor

7人の生存者が確認されました



実はまだ終わりじゃないんです

ウォード達意外にも生存者がいたんですね

名付けて7人の生存者

いずれ載せます

感想・評価お待ちしています

## バイオハザードEnemy Report（前書き）

今回登場した化け物の特徴を書いたものです

ゲームとかと若干違うので大目に見て下さい^ ^

というか完全にオマケに近いので「へー」とか「ふーん」とか「あ  
つそ」みたいなリアクションで結構です（笑）

# バイオハザードEnemy Report

## ゾンビ

特徴・・・人間がTウイルスによって凶暴化し、知能が著しく低下する代わりに力が強くなる

食欲は人間の数十倍で新陳代謝が活発になるため常にエネルギー（人肉）が必要となり

一定量のエネルギーを得ることが出来なかつたゾンビは、うつ伏せゾンビとなり獲物が近くに通るのをじっと待つ

逆にエネルギーを一定量取り続けたゾンビは進化しリッカーとなる  
なお、人間の傷口からTウイルスが入り込むと感染してゾンビとなる  
個人差があるので数時間から数日でゾンビとなるが、極稀にTウイルスに抵抗力を備える人間がいて

理性を保つたまま、強靭な力だけを得るものもいるらしい

ちなみにハイドはGウイルスをコントロールしようとしたが、まだ扱い切れていないため

ウォード達に油断した結果、敗北する

対処法・・・距離を保ちながら攻撃するのが良い

鈍器などで頭部を潰すことによって即死させるのも手

いずれにせよ、ゾンビから外傷をもらつと感染するので近寄りらずに倒すのが良い

動きが鈍いので逃げるのが一番良いかもしない

## ケルベロス

特徴・・・主に警察犬がTウイルスに感染して知能を残したまま、食欲が増加したゾンビ犬

警察犬、ドーベルマンであるため身体能力が高く、集団で襲いかかって来るので注意が必要

対処法・・・足で逃げるのは困難で集団で襲われると銃を持つても押し切られる場合がある

頭部を正確に撃ちぬく技術がないと集団から生き残るのは難しいだろ？

## リッカー

特徴・・・ゾンビがエネルギーをとり続けて突然変異したもの

耐久、動きが素早くなったものの目が退化して見えない

伸縮自在な舌は鉄のような鋭さをもつており、人間を容易に突き刺すことが可能

爪も油断できず、飛びかかりしてからの爪の攻撃は人間の肉を容易に抉る

対処法・・・物音を立てずに逃げることをおススメする

ゾンビよりも耐久に優れており、1体倒せても銃声で他のリッカーを呼び寄せるハメになる場合も

あるので、やはり落ち着いて逃げるのが良い

ウォードは田が見えないことにすぐ気付き、戦わず撤退したところを見ると

やはり戦闘のプロだということがうかがえる

## ハンター

特徴・・・両生類をベースにT-ウイルスで実験したTの中では完成に近いもの

タイプ1とタイプ2があるが、今回は知能向上したタイプ2が登場する

タイプ1はやや知能が足りなかつたため手なずける圧倒的実力者以

外は従わなかつたが

人工知能付きのタイプ2はある程度の命令は聞けるように改造されたタイプ3は猛毒をもつたハ虫類などをベースに知能はそのままという恐ろしい実験も考えられていた

対処法・・・ハンドガンでは力不足

ショットガン、マシンガン、出来ればマグナムのような強力な武器で頭部を狙う必要がある

素早いので、ゾンビのように余裕を持つてなどと考えていると首を持つて行かれる

### タイラント

特徴・・・Tウイルスでは知能の低下などが見られ、いすれビジネスのことを考えるとTウイルスでは

商売にならない、つまり出来そこないのTでは満足できなかつたハイドは研究員と共に新たなウイルスを開発していた

開発していた

しかし、どうやってもいい方法が出来ず悩んでいた時であった

病人を連れ去りいつものように実験をしていた時である

Tウイルスに抵抗を持つものが現れた

完全ではないけれど、強靭な力を持ちつつ、知能はあまり低下していない状態

その人間を実験をし、Gウイルスを生み出すことに成功した

だが、肝心なことを忘れていた

Gに耐える人間がいなかつた

何人も、否、何千人も犠牲にした結果1体だけ生み出すことに成功  
その結果、9mm弾などびくともしない究極の兵器が完成した  
知能もハンターより高く、耐久力も破壊力も申し分ない

しかし、ハイドはこれで満足せず見た目もあまり損傷しない、人間  
と大差ないようにする

実験を街を壊滅させてから考えていたが、ウォードに敗れ叶わなく  
なった

対処法・・・ むき出しの皮膚には硫酸が弱点である

グレネードランチャーの硫酸弾で、ある程度対抗できるようだ

ロケットランチャーで一網打尽にするのが一番良いかもしけない

ともかく、半端な武器ではいかがやられるだけなので

出合つてしまつたものは大抵が諦め、人生を終える

### スーパー・タイラント

特徴・・・タイラントが生命の危機を感じた時に突然パワーアップするらしい

本編ではまだ登場していない

対処法・・・?????

### クロウ

特徴・・・カラスがゾンビなどを突いて食べたために感染した化  
け物

知能はあまり低下しておらず、集団で人間を襲うといつ凶暴性が高  
まっている

本編では登場していないが、たくさんの人間が被害にあつてているだ  
らう

対処法・・・普通のカラスと違い爆竹、銃声にも物怖じなくなっ  
ている

飛んでいるため、銃で狙うのが困難  
したがって逃げるのがよい、もちろん外傷を負わないよう

## バイオハザードEnemy Report（後書き）

次は登場人物の特徴を書きたいと思います

いつになるのかは未定ですね

なにせ今思いつきましたから（笑）

## バイオハザードSeven Survivor（前書き）

7人の生存者の話

それぞれがどうやって生き残ったのか

完全に本編ではないんですけどようじくです^ ^

# バイオハザードSeven Survivor

ウォード、ラム、リサ、カインは街から脱出した

実際ハイドを倒してボロボロになつた彼らに他の生存者を捜す余裕はなかつた・・・

あちこちの骨は折れ、弾薬も尽きた

流石に特別警察といえど人間、人間に過ぎなかつた・・・

だが、他にも生存者がいたことは彼らは知らない

・・・

「ハアー・・・どうしてこうなつたんだ!?」 「だからこの街はや  
なんだよ」

自宅のテレビを見ながら男はため息をついた

男の名はアンディ

ソファーに寝転びながら、テレビのニュースを見ている

政府はこの街に核を撃ち込む気だ

ここについては木端微塵!

「ちつ、車今修理に出してないんだよな」「カーショップからパクるか・・・」

アンディはセリフを聞く限りチンピラのように思えるが、眞面目に働いている高収入の男性だ

冷静な判断で上まで登り詰めたその頭脳は、車が必要、武器が必要だとすぐに判断した

「家にはベレッタしかないな・・・こりあガンショップの行かんとな」

ジャケットの下には防弾チョッキ、サイフ、ハンドガンをそれぞれ装備して玄関を出た

24時に爆弾を投下するらしい

まだ4時間はあるから、時間はいいが外の様子が気になつた

ガチャリ

家から出ても周りには誰もいない

「この辺に奴らはいない、か・・・」「好都合をつとめとガンショップだ

「ガンショップ・イエローシャンパン」

このあたりで有名なガンショップと言えばイエローシャンパンだ

豊富な品ぞろえに、詳しい説明をしてくれる店長が評判だ

店長は凄腕の軍人だったとか・・・

店には張り紙があつた

「店は開けておく、人喰い病に備えて誰でも武器を持つて行くとい  
い」

「流石はヴェンだな！ 気前がいいや」と感心するアンディ

「カラーンカラーン」と入った時に音がする

それは、ガンショップとは思えないどこか癒しの音だった

「何人か入った形跡があるな・・・」「ていうか武器何にすつかな」

「テレビの化け物を見る限り動きは遅いんだよな・・・ただ住民が化け物になるなら弾が多い方がいいよな」

アンディは瞬時に判断し、弾薬の多いマシンガンを手に取る

「あまり大きくてもいかんから、小さいの2丁だな！ カッケーな！  
！」

「んじゃ、マガジンも貰うぜヴェン

マガジンも2つ取つておいた

「さて、と」「次は車」

ここから歩いて数キロあるとここにカーショップがある

その辺に車は放置されているがエンジンがつかないから意味がない

やはり歩いて行くしかなかつた

「自転車とかあればな・・・」ヒアンティはぼやく

残り3時間30分

1時間もあればカーショップだからやはり余裕だと思つた

「やっぱ街の中心街じゃねーから化け物と出くわさんな・・・」

つかつかと20分歩いていた時だつた

「グルルルルル・・・」

「んー?」と後ろを振り返る

「...やべえーなこれ

ケルベロスが3匹

人間の臭いにつられてやつってきたのだろう

「おいおい、犬まで化けもんになるのかよ!聞いてねーぜ」

数秒ほどの沈黙が続き、ケルベロスは一斉に向かつてきました

力チャヤ、ドードドドーン

マシンガンの2丁攻撃

流石の化け物も蜂の巣だ

バタツ、と3匹は倒れた

「やつぱりマシンガンで良かつたわ」「ハンドガンだけだったら死んでたな・・・」

バサツバサツ

「ん？またかよ」「つてカラスも化けもんかよもしかして」

銃声に反応してクロウの群れがやって来た

「人喰い病の人間を喰つて感染したとかそんなんだろどうせ」

飛んでいる奴には中々当らないと判断したアンディは逃げ出した

「カーカー」

「痛てつ、おいおいジャケットが破れやがった！」

クロウのついたばみでジャケットが破れた

頭など突かれたらひとたまりもない

アンディは逃げながら発砲する」と云した

（アドアーディン）

パタッパタッと二つかのクロウは落ちてゆく

「……おしゃいたカーショップ」

実際に30分以上も走り続けたアンディは中々のものである

「ハアハア・・くそ、鍵か・・・」

カーショップは当然閉まっていた

ドドーン

マシンガンで鍵を壊す

「フーー、カラスから逃げ切ったか・・・ハアハア」

ジャケシトはボロボロ、ジーパンも穴があきだらけ

服から突かれたのであざで済んだが、生身だったら肉が抉られていた

ガレージの中には車があるだらう

しかも鍵がなくてもエンジンがつく

電気をつける

「…………！」

人型の化け物！！！

「ガレージの中に…………！」

5体の従業員ゾンビである

力チヤ、引き金を引く

力チヤ

「…………？」

もう一度

力チヤ

「まさか！？」「

そのままか

「弾切れ」

30分もの間、少しづつとはいって連射していたマシンガンはマガジンを含め空になっていた

「おいおい・・・」

自信家のアンディも流石に涙目になっていた

「いや、すぐに車に乗り込めば・・・」

バタン

ブルルルン

エンジンをかける

窓ガラスにはゾンビ達が群がって叩いている

その後アンディはさらに泣きたくなる

「ピーピーピー、防犯ロック作動」

「ハンドルをロックしました」「パスワードを入力して下さー」

「こればかりは、「最新技術」とやらを恨んだ

「ちよつ・・・待てよ!・!・なんでこんな時に・・・」

手汗が尋常じやない

バン、バン、バンと知能低下した化け物共がガラスを叩く

強化された力は、あと数十回叩けばガラスが割れるのを物語る

「××××」と手早く入力

「ブーブーブー、パスワードが違います」

「くそっ、くそっ、くそっ・・・」

「××××」

「ブーブーブー、パスワードが違います」

「××××」

「ブーブーブー、パスワードが違います」

アンディは完全にパニックになつた

頭の中は真っ白

その時

ガシャアアアン

窓ガラスが割れた

・・・・

ブーンといつ音と共に車は発信していた

といつより気が付いたらアンディは道路を走っていた

最後に無意識に打ったパスワードは正解していた

「ハアハアハア・・・助かった〜」

「ん?ちょっと待てよ・・・」

「これ、  
「

「俺の車じゃあん……！」

パスワード「アンディ」

ほつとしたアンディはちやつかり持つてきた缶コーヒーを口元に安堵していた

ひつじアンドイは無事に街を出た

バイオハザード Seven Survivor（後書き）

ありがとうございました

感想・評価をお待ちしております

バイオハザード Seven Survivor 2(前書き)

2人目の生存者の話

# バイオハザードSeven Survivor 2

・・・

気がつくと、血の臭い

ぼんやりとした意識の中血の臭いが異様に気になつた  
自分から出でている血、いや、それだけじゃない

仲間の血の臭い

「・・・・・クツ・・・・・・・」

ゆっくりと意識が戻つていった

周りを見渡すとそれは地獄絵図だつた

特別警察のメンバー6人が全滅だ・・・

そう、特別警察副隊長エドワインだけがかろうじて一命を取り留めていた

少しおかしい

エドワインは自分で思った

腕時計を見ると日付が2日経っていることになる

この出血、時間の経過からして死んでいてもおかしくない

とこつか他の隊員のように普通は死んでいるハズだ

「・・・出血している部分に致命傷がなかつたつてことか?」

だが、ろつ骨などいくらかの骨はハイドにやられているのが分かつた

「まあ、丈夫なのが取り得なもんだからな・・・」

ゆつくりと腰を上げて立ちあがつた

やはりろつ骨やら打撲、切り傷、銃弾による傷などと命は取り留めてこそいるが

絶対に安静が必要だつた

が、そんなことは言つてられなかつた

先ほど携帯からコースを見た

24時に爆弾が投下されるところなのだ

今の時間は21時過ぎ

もう少し寝ていたら確実に爆弾の餌食になつていた

一番マズかったのが、入口に続いている道がふさがれていることだ

つた

よつて地下の奥を進むしかない

知らない道に、この怪我に化け物共、せりこむタイムコマッシュア

心理的には相当負担が掛かるに違いない

「諦めるわけにはいかない、死んだ仲間の為にも・・・」

当然、ハイドはいない

一緒にハイドと戦っていた化け物もいなことじりを見るとコントロール可能な化け物なのかもしれない

特別警察をハイドと一緒に全滅させるほどの実力だ

街中で悪用されたら被害は大きいだろう・・・

武器を手に取りハイドウインは奥へ進んで行った

仲間の武器の弾薬は尽きていた・・・弾のわずかな自分の武器を手に・・・

奥に進んで行くと、研究していた痕跡が多く見つかった

レポートなどを読んで進みたいところだが時間がおしている

そのまま前進していった

ズル、ズル、ズルとズボンのすそを引きずる音がした

「こひへ向かつてくる

血の臭いに反応したのかもしだれない

そう考へると2日意識の飛んでいたエドウインが生きていたのは不幸中の幸いかもしだれない

「相手にしている暇はない……」

急ぎ足で進んだ

「こひは、どこに繋がつてゐるんだ?」かなり歩いたエドウインは思つた

病院の地下から入り、反対側に向かつて歩いてゐるのだが中々出口が見えない

「22時24分……あと1時間30分か……」

ズキズキと色々な個所の傷が痛い

疲労、怪我、時間、心理的不安、精神的ショック、弾薬不足、ここまで苦しい任務は初めてだ

「……ちつ

前方に研究員ゾンビ3体

## 弾はあと9発

しかも、ハンドガンでもつマガジンはない  
このトンネルの広さ

2体なら無視できるが3体となると厳しい  
「お前らこなせる弾はないんだよーーー」

Hドウインはギリギリまで3体のゾンビを引きつけた  
知能の低いゾンビは、自分が喰つて自分じゃ、と言わんばかりに一斉に襲ってきた

そのタイミングを狙つてHドウインは避ける  
3体の低知能はぶつかり合つてよけた

「今だーーー」

トンネルに出来た隙間からゾンビ達をまいた

ポタ、ポタ・・・

「出血・・・か」

小さな点々を地面に垂らしながら進んで行つた

ようやく出口が見えた

「ここで最後か・・・」

ドサッ

「！！！」

もうお決まりかのようにハンタータイプ2が現れた

「お前を倒して脱出してやる！..」

このハンタータイプ2は爪が無かつた

捕獲用のハンターだった

抵抗する人間を死なないように攻撃して捕まえるハンタータイプ2

実験するにおいて必要な存在だった

代わりに鈍器のように腕は発達していた

ダッ

ハンターは駆け出す

ブンッ

腕を力任せに振る

エドウインは痛む体にムチを打つて避けた

ドゴン

トンネルの壁が崩れた

「・・・当たるとマズイな

力チャ、バンバンバン・・・・

頭に9発

「流石に死なんか！」

弾は空っぽ

ブンッ

ハンターの2発目

来た！とエドウインはしつかり見ていた

だが、傷が痛む

「うぐっ、こんな時に・・・」

ドゴン

エドウインの腹部に命中

まるで、金属バットでプロ野球選手にフルスイングされたかのようだ

「ガハッ・・・・」ボタボタと血が落ちる

ただでさえひつ骨やら他の骨を折っているボディワインには相応じた  
えた

「ううう・・・」気絶してもおかしくない痛みが走る

実際意識が飛ぶ寸前だった

「あ、おれは・・・」

「こそこそ・・・ヒー、うで・・・」

「仲間」といつ言葉がヒドウインの頭に過る

その瞬間意識が戻った

「仲間の死を無駄に出来るかアア――――!」

渾身のパンチを繰り出す

ハンターの何度も銃を撃たれた所に命中した

ガゴン

ハンターはフラフラし

バタッ

崩れていった

「よしひ、ハアハア、今のうちだ」

エドウインはハシゴを上った

出た先は病院から離れた路地裏の場所

車を見つけ中に入ると運よくエンジンまでついた

ブルルルン

「すまねえ車貰つからな・・・」

23時36分

エドウインは街から脱出した

運転中たくさんの化け物達を見たが、生存者はいなかつた

飛びそうな意識の中、ウォードとラムの安否が心配になっていた

「必ず、生き延びろ・・・！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6646w/>

---

バイオハザード

2012年1月14日18時52分発行